第7期　第6回　静岡市行財政改革推進審議会　会議録

１　日　時　平成29年１月24日(火)　14:00～17:00

２　場　所　静岡庁舎新館９階　特別会議室

３　出席者　【委員】
岩崎清悟会長、内野孝宏委員、狩野美佐子委員、小林敏宏委員、西村やす子委員、的場啓一委員、酒井康之委員、種本祐子委員

【行政】
池谷総務局長、石野総務局次長、三宅総務局参与、遠藤財政局次長、川﨑参与兼行政管理課長、山口政策法務課長、和田参与兼人事課長、大石参与兼財政課長、荻野参与兼公共資産経営課長

〔関係局〕
観光交流文化局、都市局

〔事務局〕
遠藤行政管理課行財政改革推進担当課長、窪田副主幹、兵庫主査

４　傍聴者　なし

５　会議内容

【会議内容】
１　開　会
２　議　事「ユニークベニューの推進」
３　閉　会

岩崎清悟会長：それでは、次第に沿って進めていく。はじめに、審議スケジュールと審議事項の確認について、事務局から説明願いたい。

≪略：事務局説明≫

岩崎清悟会長：本日は、市から具体的なユニークベニューの取組等が提示されたので、市の説明を伺った上で、委員の皆さんに実施いただいた駿府城公園の視察等の感想や意見なども踏まえ、審議を進めていきたいと考えている。
それでは、はじめに駿府城公園再整備事業の概要について、都市局から説明願いたい。

≪略：都市局説明≫

岩崎清悟会長：続いて、ユニークベニューに係る他都市の導入事例及び市からの事業提案の事例等について、都市局及び事務局から説明願いたい。

≪略：都市局、事務局説明≫

岩崎清悟会長：ただ今、駿府城公園再整備事業の概要及びユニークベニューの事例等について説明があったが、委員の皆さんには10月に駿府城公園の各施設を視察いただいたため、その感想も踏まえ、まずは駿府城公園を中心としたユニークベニューとしての使い方等について、忌憚のないご意見を伺いたい。その際、駿府城公園以外の論点が出てきた場合には、随時話題を広げていくこととしたい。小林委員から順にお願いする。

小林敏宏委員：視察の際に久しぶりに駿府城公園を訪れたが、これほど身近にありながら、イベント等がない限りほとんど市民に利用されないという今の状態は非常にもったいないと感じた。市の職員全員が駿府城公園に行き、どのように活用したらいいか、１人１人が意見を出しあえば、面白いアイデアが生まれると思う。昔はテニスコートや野球場があり、市民が利用できる公園だったが、いつの間にか誰が使うのか分からない中途半端な公園になってしまった。

静岡市には駿府城公園と城北公園くらいしか大きな公園がないが、小さい子供がいる私の娘は、そこへ子供を連れていっても何をして遊べばいいか分からないし、小さな売店しかなく何か飲みながら休憩することもできない。観光客もどこに行けばいいのか分からない状態である。そのため、わざわざ藤枝市の蓮華寺池公園まで出かけている。蓮華寺池公園にはスターバックスコーヒーがあり、無料の広い駐車場もある。さらに屋外にも屋内にも子供が遊べる場所もあり、市民のための公園として整備されている。一方、駿府城公園は、計画に基づいて整備しているが、一体どこへ向かっているのか分からない。また駿府城公園は、他都市の大規模公園に比べて面積が狭いため、いろいろな要素を詰め込んでいくとインパクトがなくなってしまう。歴史を感じられる場所にする方向性であれば、その１点に向かっていくべきではないか。

また、紅葉山庭園でユニークベニューをしたいとのことであるが、スペースが限られているため何かするのは難しいと思う。巽櫓や坤櫓にしても、何をするための施設なのかというのが正直な感想である。その上で唯一提案できるとすれば、坤櫓に２階、３階があるのだから階段が急でも見学できるようにしてはどうか。現状ではとてもお金を払ってまで見たい施設とは思わない。やはり紅葉山庭園や櫓を活かすには天守閣が必要だと思う。天守閣があれば「ボートによるお堀の水辺活用」等の事業にも活かすことができる。歴史を感じられる観光の目玉スポットとして位置付けて整備を進めていくことがベストだと思う。整備計画の基本方針が30年程前に策定され、ほとんど見直していない計画に基づき粛々と整備を進めていると聞いたが、整備事業費として100億円の予算があるならば、思い切って計画を見直し、もっと効果のある内容にすべきである。

ユニークベニューとして今回提案された事業は、いずれもどんどんやるべきだと思う。むしろ既に実施されていておかしくないものばかりである。これらの提案はどの部局で考えたのか。

事務局：各所管課が作成した素案を市内部でオーソライズしたものである。

小林敏宏委員：多くの提案の中からピックアップしたということか。

事務局：本審議会では駿府城公園をモデルケースとして審議を進めているため、市が所有する施設は数多くあるが、まずは駿府城公園内で実施できる事業について各所管課で検討してもらい、本日提案させていただいたものである。

小林敏宏委員：市全体で検討したのか。

事務局：公園を管理する所管課や観光の所管課など、関係する部署に行政管理課から声をかけ、提案されたものを庁内で検討したもの。

小林敏宏委員：関係課に限らず多くの人から提案を募り、その中から決定したのではないということか。

事務局：そうである。

小林敏宏委員：むしろ多くの人からアイディアを募集した方がいいと思う。

内野孝宏委員：静岡市が目指しているまちづくりの中で駿府城公園が活かされているかというと、疑問である。ではどの方向に持っていくべきかと考えた時に、多くの市民が利用しやすい場とする、市民の生きがいや交流の場とするなど、複数の要素があっていいと思う。今回提案された事業はどれも面白いものなので是非取り組んでいってもらいたいが、むしろこのようなアイディアを出すためのプラットフォームを作ってもらいたい。例えば、民間では、スペースマーケットという会社が、結婚式場やお寺、図書館など様々な場所についてどういった使い方があるか全国からアイディアを募るという取組を行っており、自治体も利用しているとのことである。そのようなプラットフォームを設け、市は使い方についてある一定の方向性に基づき条件付けをしていけばいいのではないか。また、プラットフォームにおいて１万人から２万人程度の市民にアンケートを実施し、その結果をクラスター分析してもらえば、市民の考え方も概ね把握できる。この場で方向性を議論するより、そういったアイディアが次々出てくる手法について検討してもいいように思う。

西村やす子委員：私も駿府城公園の視察に参加したが、それぞれの施設については、よく観光地にある、お金を払って入ってみてがっかりする施設と同じような印象であった。今昔スコープなど、設備に大分お金をかけているようだが、費用対効果が出ているのか疑問。

政策推進統括監：今昔スコープは一度に２人しか体験できないため、今はタブレットでＣＧ画像を見られるようにした。

西村やす子委員：ボートでのお堀めぐりは楽しそうである。青空カフェは、首都圏のマーケットをもう少し勉強した方がいい。どうしても寄せ集めの域を出ないように感じられる。結局、この場所から何を発信したいかがぶれているので、何をやっても寄せ集め的な雰囲気が出てしまう。ランニング等環境整備は、既にお堀の周りを走っている人が多くいるので、上手に工夫すれば広く利用してもらえるものになると思う。紅葉山庭園については小林委員とほぼ同意見である。野外芸術公園化も、上手く展開できれば幻想的な空間を作り出すことができると思う。個人的な意見として、個々のコンテンツは面白そうなものからつまらないものまでいろいろあるが、先ほどから意見が出ているとおり、多くのアイディアを出してそれをまとめていけばいいのではないか。

また、歴史文化のまちを発信するとのことだが、駿府城公園に観光目的で来る人はどれくらいいるのか。静岡市を目的地として観光に来る人はどのような人なのか。

観光交流文化局：世界遺産になった三保松原、久能山東照宮、浅間神社、登呂遺跡が主な観光地であるが、問い合わせ等があった際は駿府城公園の各施設についても情報提供している。

西村やす子委員：首都圏に住む友人と話をすると、駿府城公園の認知度がものすごく低い。他都市の事例として金沢城公園や名城公園が挙げられているが、既に認知度においてこれだけ遅れを取っているので、同じようなことをしてもその遅れは取り戻せない。歴史文化のまちを発信していくことは重要だと思うが、あえて駿府城公園で発信をする必要があるかについては疑問を感じる。今の方向性で進めていったとして、５年後、10年後、さらには30年後の市民がそこに価値を見出すことができるのか。静岡駅から浅間神社に至る動線において、駿府城公園がどのような役割を果たすのか、これからのまちづくりを担う若い世代に議論してもらった方がいいように思う。静岡市には、休みになったら何となく行きたくなるような公園がない。他都市には、ショッピングモールのように人が集まってくる公園がたくさんある。例えば、歴史的な価値のある場所に外国資本のコーヒーショップを置くのは好ましくないなど様々な意見があると思うが、人が集まる要因は、そういった理屈や昔からの価値観とは別のところにあるのではないか。あえて一旦立ち止まり、駿府城公園を有効活用するためにこれまでの方向性で本当にいいのか、価値観ががらっと変わる時代であるので、20年以上前の計画については見直してもいいのではないかと思う。また、見直しに当たっては、外部の意見だけでなく、内部の職員が前向きな議論をできる場があるといいと感じた。

種本祐子委員：各事業については、よく考えてとても楽しそうなものを提案してもらったと思う。ただ、ここで審議をしている私たち委員もこの事業を考えた職員も、まちづくりについては素人である。これをブラッシュアップしていっても素人の域は出ないと思うので、プロの手を借りた方がいいのではないか。新たにまちや商業集積ができる時、まちづくり事業を行っている企業はまずコンセプトから提案する。例えば、千葉県の柏の葉では、Ｔ‐ＳＩＴＥが「新しい文化拠点」をコンセプトとして掲げ、市民の憩いの場とする事業を行っている。コンセプトの実現のために、周辺にどのような人が住んでいるのか、そのうちどの層をターゲットにするのか、観光面ではどのような人に来てもらうのかなど、あらゆる要素を調査・分析し、その上でどういった店舗を入れるのかといった各論の検討に入るのである。今回提案された事業は、各論的にはとてもいいものであるが、前提となるべきコンセプトや誰に何を発信したいかということが固まっていないため、ただいろいろな人がいろいろなアイディアを出しているだけになってしまっている。提案事業はいずれも素人の公務員が考えたとは思えないくらいの内容で、アイディアマンがたくさんいるのだと感心した。しかし、まちづくりのプロのコーディネーターを置いた上でアイディアを出し合う方がいいのではないか。内野委員の言うプラットフォームもそういうことだと思う。

内野孝宏委員：おっしゃるとおり、コンセプトを設定した上でプラットフォームを置けばいいのではないかと思う。

種本祐子委員：ただ、それは素人にはできないと思う。審議会の委員はいずれも各分野で大いに活躍されている方だが、だからといってこの場でどのようなコンセプトでどのような事業を行

っていけばいいかを考えるのは難しい。なぜなら、まちづくりの素人だからである。思い切ってコンペなどに出し、全国のデベロッパーからどんなまちづくりをするか提案を募れば、想像できないようなアイディアも出てくると思うので、その中で一番いいものを選び、市民の声なども聞きながら進めていけばいい。今や公園はそこにあればいいというものではなく、観光やまちづくりにおける都市間競争の一要素なので、その中で駿府城公園がピカイチの公園になるには、ピカイチのまちづくりのプロの任せる方がいいと思う。

狩野美佐子委員：種本委員の言うようにデベロッパーにコンセプトづくりから任せるというのも一つの方法だが、駿府城公園の再整備は静岡市が力を入れて取り組んでいる事業であるので、内部である程度案を練ってからデベロッパーに投げかけてみるということが必要だと思う。なぜ駿府城公園が現状のようになってしまったかというと、一つの公共施設としての目的がはっきりしないまま整備を進めてしまったためではないかと考える。資料に公園整備の３つの方向性が示されているが、これ以外にも市民に血の通ったサービスが提供できるような方策を考えてもいいと思う。例えば、私は毎週駿府城公園に行くが、大体いつも空いているのが、家康公四百年祭のときはものすごい人だった。つまり、市民は興味を引くことがあれば駿府城公園に行くことには抵抗を感じないので、外国のような朝市を開催するなどして市民をどんどん呼び込み、駿府城公園はこうあるべきだという市民の意見を盛り上げていくとともに、デベロッパーの意見も聞き、市がそれらを調整していくというのがあるべき姿だと認識している。

酒井康之委員：２年ほど前まで観光協会に勤務していた人間であるが、静岡市を観光面で活性化する手段については常に悩んでいた。視察で久しぶりに駿府城公園を訪れて、正直に言えば街中にこれだけいい場所があるのにもったいないという小林委員と同じような感想を持った。今所属している組織の職員に駿府城公園や公園内の施設を利用したことがあるかと聞いてみたところ、残念ながらほとんどの職員がないとのことだった。いい施設があっても知られていないのが現状である。ではなぜ知られていないかというと、いろいろな人に対応しようとするあまり、かえって誰にとっても魅力のない施設になっているのではないかと思う。坤櫓にしても紅葉山庭園にしても、入ってみるといい施設だが、歴史的な背景などが見えないため、来場者に訴えるものがない。

本当に検討しなければいけないことは、どうしたらあの場所がより魅力的になるか、それをどのように考えていくかということである。各委員におかれても個人的にああしたらいいのではないか、こうしたらいいのではないかという意見をお持ちだと思うが、行革審とは言えまちづくりに関しては専門家ではないため、それは個々の貴重な意見として受け止め、将来構想の本格的な検討にあたっては、本来駿府城公園をどうすべきかということをもう一度手順を踏んで考えるべきである。説明のあった駿府城公園再整備計画は、全く見直しがされていないわけではないにしても、20年以上も前に策定されたものである。しかし、その中で方向性が掲げられているために、それにこだわらざるを得ず時代の変化を掴むことができていない。また、歴史的側面を強く出すべきだ、観光面を重視すべきだ、防災機能の充実を図るべきだなど、あちらもこちらも立てなければいけないというしがらみもあると思う。今日良かったと思うのは、全体的に考え方が変化している中で、多少反対があっても立ち止まって計画等を見直す必要があり、見直しにあたっては外部の手を借りなければならないのではないかということが概ね一

致した意見であるという点である。それであれば外部へ委託するための予算をしっかりつけていいものに結び付けていこうというように、委員の意見の中から市が見直しにあたっての手段のヒントを得てもらえればいいと思う。この場で整備の方向性は歴史がいい、観光がいいという議論をするのは少し違うのではないかと感じている。

的場啓一委員：専門の経済学の観点から言えば、残事業が100億円あるとのことだが、本当に今から100億円かけて整備する必要があるのかということを一度検討し直す必要がある。今まで第１工区、第３工区、第４工区と40億円以上かけて整備してきたが、それによってどれだけ効果があったのかをどの程度検証されているかということも疑問である。この整備計画はちょうどバブルが弾ける頃に策定されたものであり、今の世の中の状況はかなり変わっている。価値観もかなり変わってきているので、もう一度今の計画のままでいいのかということを市民全体の気運を盛り上げて再評価・再検討することがまず一つ必要である。

また、駿府城公園は規模的にかなりコンパクトで小さな城址公園である。計画において３つの方向性が示されているが、駿府城公園はこれがコンセプトだ、これが目指す方向性だということを１つぐらいに絞ってはどうか。３つの方向性を掲げれば、役所の仕事としては３つ全てをきっちりやらなければならず、あれもこれもとなってきて、最終的にどっちつかずということになりかねない。３つあってもいいが、特にこれだというものを絞って大々的に打ち出すべきだと思う。そのためには、時代も変わってきているので、70万人の静岡市民が普段どんな想いを駿府城公園に寄せているかということを再度調査することも必要である。併せて、私も行政で作る計画には限界があると思うので、コンセプトを決めたら、あとは民間事業者の知恵やアイディアを活用すべきだろう。

今回、駿府城公園について議論するということで、実家の大阪にある大阪城公園に２年ぶりくらいに行ってきた。どこが違うのかと考えた時に最初に感じたのは、もちろん規模も大分違うが、大阪城公園には休憩所と食べるところがたくさんあるということである。疲れたらどこでも休憩できる建物があり、そこで飲食もできる。それと、周りに駐車場がたくさんあり、家族連れでも遠方からでもアクセスしやすい。これが大きく違うと感じた。

もう一つは、城の周りに大阪城ホールや近代的なビジネスパークなどの関連施設が集まっている。つまり、城という点ではなく面で考える必要があるのだろうと感じた。その意味では、静岡駅から駿府城公園までの動線にいろいろな施設や立ち寄れるところがあれば、静岡市に来た観光客が「せっかく来たから駿府城に寄ってみよう」と足を延ばしてくれるのではないか。

我々がこの場で一つ一つのユニークベニューの提案について議論するのは限界があり、どれも素晴らしい提案であるので、社会実験としてやるということであればどうぞやってくださいということになる。その代わり実験結果をちゃんと評価し、事業化するかどうかをきっちり検討するようにとしか言いようがない。それよりももっと大きく構えて、駿府城公園は何を目指す公園にするのかということを一つに絞り込む必要があると思う。

岩崎清悟会長：ただ今７名の委員からご意見を伺ったが、共通していたのはやはりコンセプトである。ユニークベニューは特別な場所をどう使うかということであるから、まずその場所のあり方というものがある。駿府城公園という場所が誰のためにどういう目的であるべきなのかというコンセプトをしっかり持つべきである。しかもそのコンセプトについては、市民アンケー

トを基に３つの方向性が示されたという歴史的な重い事実があり、その方向性に基づいて整備が進められてきたという経緯があるわけだが、自治体あるいは国全体の人口が減少し、都市間競争が厳しくなっている中で、そのコンセプトの継続が果たしていいのかどうかという点が、委員からのまず一つの大きな問題提起であったと思う。コンセプト自体をもう一度考えてみるべきではないのか、場合によってはもっと絞り込んだコンセプトにすべきではないかという意見が強かったように思うし、私も全くそのとおりだと思う。もちろん具体的な使い方やイベントの実施方法等は素人が考えるのではなく、コンセプトさえしっかりしていれば、むしろコンペで外部に委託した方がいいことは明々白々である。本審議会でどんな使い方をするのかという結論を出しても、はっきり言って全く意味がない。それは次の段階で検討することとして、またコンセプトを決めるというのも審議会の役割としては違うと思うので、コンセプトを今のまま継続していいのか、それとも考え直すべきなのかという点について議論してみたい。既に整備計画において３つの方向性が示されているが、これは市として堅持しなければならないものなのか、あるいは時代に合った今日的なテーマに変えていっていいものなのか、そこをまず伺いたい。

都市局：整備計画は平成17年に一度再評価を行っているが、そこからさらに10年以上が経過しており、委員からも時代に合わないのではないかという意見を多くいただいたので、既に作った施設を台無しにするようなことはできないが、それを活かす方向での見直しは当然行って然るべきだと考える。

岩崎清悟会長：プロセスを踏めば見直しは可能だということか。

都市局：そのとおりである。

岩崎清悟会長：各委員におかれては、計画の見直しが可能だということを前提として考えていただきたい。基本方針が策定された昭和63年、整備計画の再評価が行われた平成17年、そして現在と、それぞれの段階における日本あるいは静岡市の状況の変化として一番大きいのは人口のあり方だと思う。日本全体が人口減少期に入り、なかんずく静岡市は最も人口減少が激しい地域の一つに数えられている。そういった状況の中で、15ha弱の市街地にある、しかも歴史的な意味を持つ土地をどう考えるのか、是非委員のみなさんの考えを伺ってみたい。まず、コンセプトについて、今日的なあり方をどう考えるか。的場委員から順にお願いする。

的場啓一委員：岩崎会長がお話しになったように、一番大きな社会状況の変化は少子高齢化に伴う人口構造の変化である。その中で、いかに若い人たちをまちに呼び寄せ、あるいは域外の人を引きつけるかということが課題となる。特に、高齢者が放っておいても増えていく中で、若い人をどういう風に引きつけるかと言えば、歴史と現代の２つを上手くマッチングするような公園になれば、お年寄りから若い人まで全ての年代層の方に興味を持ってもらえるのではないか。「歴史と現代のマッチング」、あるいは「歴史と現代の調和」という方向性が考えられるのではないかと思う。

岩崎清悟会長：「歴史と現代の調和」について、もう少し具体的にはどのようなことか。

的場啓一委員：例えば、他都市の事例として富岩運河環水公園へのスターバックスの出店について紹介があり、世界一美しいカフェと言われているとの説明もあったが、先ほど話題になった蓮華寺池公園のスタバもとてもきれいなところである。私も静岡市に在住している頃にスタバ

を目的に何回か行ったことがある。それぐらい引きつけるものがある。お年寄りにとっては「カフェって何？」ということになってしまうかもしれないが、若い人たちにとっては公園のきれいな景色を見ながらカフェでゆったりした時間を持てるというのは、非常に素晴らしいゆとりの時間、癒しの時間である。このように、歴史の中に近代的なカフェなどの飲食できる施設を持ち込むというのも一つの歴史と現代のマッチングと言えるのではないか。

酒井康之委員：人口減少の原因がどこにあるのかということをしっかり掴み、ある程度データ分析に基づいた対応をすることが必要である。もし働く場所がないとか、まちに魅力がないために大学を卒業しても静岡市に戻ってこないという事実があるとすれば、そういう期待に応えられるような方向性を打ち出すべきだと思う。

岩崎清悟会長：もう少しまちの魅力を高めるような、人を引きつけるようなコンセプトをということか。

酒井康之委員：あまり具体的ではなく申し訳ないが、いい公園があるから行ってみたいと思わせるようなものにするということである。

狩野美佐子委員：東御門を通る人たちの声に耳を傾けてみると、「この御門は古くはないな」とか「ないよりはいいな」といった言葉が聞かれる。駿府城公園のあり方としては、市の中心部にオープンスペースがないということもあるので、避難スペースとして確保することが重要だと思う。防災対策は人の命に関わることなので、避難地を確保することが先決事項である。また、市民に還元できる公園であってほしい。先ほども申し上げたが、朝市やフリーマーケットなど、市民が盛り上がれるイベントを年中開催できるような公園になってほしいと思う。

種本祐子委員：コンセプトを考えるのが一番難しいことである。コンセプトを考えて外部に委託すればいいと言うが、それを考えることがプロフェッショナルの仕事だと思うので、これまで委員から出た意見をプロフェッショナルの方に投げかけ、これがコンセプトだということを提示してもらえばいいのではないか。

　自分なりに、「この公園があるから、このまちに住みたい」というキャッチコピーを考えてみた。防災機能も歴史的価値もある世界に誇れる公園であるとか、どこよりもかっこいいカフェがある公園であるとか、わざわざ静岡市にＩターン・Ｕターンしたい、あるいは新幹線通勤をしてでも静岡市に住みたいと思ってもらえるのはどんな公園かということをみんなでディスカッションしていく中で、コンセプトを作っていけたら楽しいのではないか。そこをまとめるのはプロでなければ難しいと思う。

岩崎清悟会長：「この公園があるから、このまちに住みたい」というのはすごいコンセプト。プロに頼む時に、彼らが一番困るのはノーコンセプトで頼まれることである。コンセプトから考えてくださいと言われるのが一番辛いそうである。結局それだけ難しいということ。やはりクライアント、つまり市や市民の考え方が分かっていないといいものは出てこない。そうなると、既存のアイディアを寄せ集めたものになってしまうので、どういうプロセスで作り上げるかという点は重要だが、ある程度コンセプトを主体的に考えておかなければならない。それが市のあり方を象徴するものになる。例えば、企業は理念が大事である。理念がないと、とにかく儲かればいいとあちこちに手を出し、全部失敗する。我が社はこの理念で生きるのだというものがないと継続できない。だからトップの役割は常に理念を示すことであり、頑張ってその理念

を守り通すことである。そのスタンスは市の経営においても同じだと思う。ただ、時代や環境が変わった時に古い理念のままでいいのかということはいつも考えていかなければならない。その難しさがあるように思う。だからこそコンセプトというものにこだわりたいと思っている。

西村やす子委員：整備計画等の策定時にプロのコンサルはもう入っているのではないか。

都市局：入っている。

西村やす子委員：大体市役所の事業は外部のコンサルが入っていて、例えば城下町であればこんなもの、海を持っているまちであればこんなものというように、どこのまちでも同じようなものがいくつも出てくる。恐らくこの計画にしても、金沢などの城下町で行われているのと同じような内容になっているのではないか。その点については、最初のコンセプトの打ち出し方が弱かったように思う。

最近いろいろなものについて情報発信しているが、例えば歴史文化をアピールしても金沢や京都には負ける。最近聞いたのだが、静岡には「ふるふる詐欺」があるらしい。雪が今度こそ降るぞと言われて準備するが、結局降ることはないというものである。日本全国異常気象になっても静岡市は雪も降らず、本当に住みやすいまちである。その「住みやすい」というキーワードで食べ物や人などいろいろな事柄を繋げていくと、全国や首都圏から人が殺到してもおかしくないくらいのポテンシャルがあると思う。家康が最後の居住地に選んだということからしても、「住みやすさ」や「生活しやすさ」に全てが集約されるように思う。派手派手しい大きなキャッチコピーではなく、「住みやすさ」をしっかり発信できる場所にするというコンセプトのもと、駿府城公園のあり方を考えていければいいのではないか。都市間競争になった時に、勝てるところはやはり「住みやすさ」である。先般、ある雑誌の住みやすいまちランキングでも上位に入っていたと思うが。

政策推進統括監：「住みたい田舎ベストランキング」である。

西村やす子委員：山も海もあって、ある程度の都市機能もあるのでとても住みやすいと言われるが、それが客観的な結果として出てきた。私の周囲では、その雑誌のランキングがFacebookなどで多くの人に共有されていた。外の人に認めてもらえたということがとても誇らしかった。もっと図々しく自分たちから日本一住みやすいのだということを発信してもいいと思うし、それを発信する一つのコンテンツとして駿府城公園を位置付けてもいいと思う。

内野孝宏委員：基本方針等が策定された際の詳細な経緯は分からないが、この３つの方向性は一つのコンセプトの中の３つの柱という程度で考えてもいいのではないか。長泉町の下土狩駅周辺の活性化に携わっているが、そこでもまちの顔として駅に何を求めるかなどについて住民アンケートを実施した。市としてなぜその方向性を選んだのかと聞かれた場合には、アンケート結果のクラスター分析をもって、こういう人たちがこういうことを求めているのだとして、市は一定の説明責任を果たすことができる。しかし、それは必ずしもいくつもの方向性を打ち出さなければならないということではない。ではどうするかというと、個人的な意見であるが、大テーマは岩崎会長が言われたとおり人口減少である。その大テーマの下にこの３つの方向性などがあるのだと思う。やはり若者が未来を楽しむような場所、できれば国家レベルでＩｏＴの実験場にしてもらうと面白いのではないか。例えば大道芸にしても、ただ人が集まって大道芸を見ているというだけではなく、来場者が飲み物が飲みたいと言えば届けてもらえるなど、

今らしい面白い仕組みを取り入れていくようなコンセプトを設定できれば面白いと思う。人口減少対策においては、付加価値を高めて生産性を高めるということが手段としてあるので、最上位に置くかどうかは別として、ＩｏＴやＩＣＴを活用するというコンセプトが一つあってもいいのではないか。

小林敏宏委員：私が常々感じているのは、静岡市全体のまちづくりのプロデューサーがいないということである。ある程度専門的な知識を持ち、市民のコンセプトを上手く吸い上げて、静岡市はこうやって都市間競争を勝ち抜き、世界に魅力ある都市にするのだということをプロデュースする人がいない。市長は「私がプロデューサーだ」と言うかもしれないが、市長はアイディアマンでいい。それを具現化して実現するのがプロデューサーであり、そういった人が静岡市には必要である。その中で本審議会も一つの機関として活かしてもらえればいい。

ユニークベニューについて一つ質問だが、巽櫓等の中で飲食はできないのか。

都市局：お茶会などを開催した実績はあるが、元々そういったことをするための施設として作っていないため、設備がない。道具を外から持ち込んで行うことは可能である。

小林敏宏委員：現状の施設を活かしながらいかに人が集まるようにするかというと、思い切って他ではやっていないことをやるのがいい。ユニークベニューの中で唯一面白いと思ったのは、発掘調査の現場が見られるようにしていることである。駿府城の発掘については多くの人が関心を持っている。ただ、残念ながら見せ方がよくない。土日には歴史に興味がある人や子供たちも訪れる。発掘調査はあと数年続くとのことなので、これを上手く利用して、浅間神社や臨済寺を含めて歴史探訪ができるようにすれば、市内外から参加する人があると思う。今はウォーキングも流行っているし、浅間神社の裏手の山を登ると気持ちがいい。また、周辺には歴史的な寺社が多くあり、臨済寺も大河ドラマの「直虎」で脚光を浴びている。先週の「直虎」の放送を見ていて残念だったのは、ドラマゆかりの地として駿府城公園が紹介された時に、公園内の遊具が映ってしまったことである。歴史を感じられるよう、できれば遊具も木で作ったものや城をイメージしたデザインにしてほしい。青空カフェにしても、キッチンカーを城のようなデザインにし、そこで働く人にも忍者とまでは言わないがそれなりの格好で給仕などをしてもらい、やはり駿府城の跡地の公園だからそういう雰囲気があるのだということを発信してほしい。コンセプトの部分では、静岡市の魅力を発揮するという意味において、「徳川家康が愛したまち」ということで歴史感を出していく。先ほど西村委員は歴史文化では金沢や京都に勝てないと言われたが、私を含め多くの市民は、静岡市にはポテンシャルがあると思っている。ただ、今までやってこなかった、見せていなかっただけである。そこを見せていっていただきたい。

先ほど、ユニークベニューの事業について、全庁的にアイディアを募っていないのかとなぜ聞いたかというと、市の職員の意識の問題だと考えるからである。市の職員の意識を駿府城公園に向けて、ここをどうにかしたいと思わなければ何も変わらない。休憩時間でもいいので一人ひとりが駿府城公園を見て、アイディアを出せば、何とかしようということにもなる。関係部署だけがやっているのでは「俺たちは関係ないな」となってしまう。岩崎会長から企業は理念が大事だというお話もあったが、市役所全体が一つのコンセプトに向かっていかなければ、市民を巻き込むことはとてもできない。是非そこから取り組んでもらいたい。

これまで３つの方向性の下で整備を進めてきたことについては理解できる。ただ、見直さなければならないのは、方向性①「歴史的遺産の保存・再整備」において「歴史的建築物は史実に基づき復元する」としているところである。恐らく市民アンケートではここまで求められていないと思うが、これがネックになって天守閣も作れない。その「復元」という部分が見直すべき時期に来ているのではないか。なおかつ、防災の機能は持つべきである。この計画はある程度よく考えられていると思う。しかし、順番として次に清水御門を作るべきなのか。二の丸休憩舎はどのようなものを作るのか。100億円あるのならば、その前に天守閣を作ってもらいたいというのが多くの意見だと思う。やはり静岡市を賑わいのあるまちにしなければならない。人口減少対策は一にも二にもそこである。賑わいがあれば買い物客も来るし、雇用も生まれる。静岡市の未来を活かすも殺すも駿府城公園のあり方次第だと言ってもいいくらいのポテンシャルがあると思う。

文化会館も今度建て直すと聞いたが、先ほどの的場委員の話にあったように、近隣にある体育館を「駿府城アリーナ」、文化会館を「駿府城ホール」というような名称にするということも大事ではないか。駿府城公園を訪れる観光客の第一の感想は、名前に「駿府城」とあるのに城がないということである。市の関係者は「駿府城公園全体が城だ」というが、一般的に城と言えば天守閣である。観光客が来て「城がないじゃないか」と言って帰ってしまうということも聞く。今後駿府城公園として整備を進めるのであれば「駿府城」を柱とし、そこから枝葉を広げて様々なイベントをやってもらい、周辺の臨済寺や浅間神社、浅間通りなどを含めて歴史を感じられるまちにしていってもらいたい。

岩崎清悟会長：基本方針に掲げられている「歴史的遺産の保存・再整備」と「都心部の公園機能の強化」、この２つを同時に実現している公園が世界にあるかと考えてみると、例えばニューヨークのセントラルパークは全く歴史的なものがないが、セントラルパークを臨むレストランやカフェ、コスモポリタン美術館などいろいろな施設があり、ものすごく人が集まる。つまり、セントラルパークそれ自身は単なる森でしかないが、それを借景としてまちが作られたことにより、ものすごく魅力的なまちになっている。一方で、フランスのフォンテーヌブローに行くと、歴史的なものだけしかなく、全く公園ではない。これまで訪れた様々な場所を振り返ってみても、歴史的な遺産を構築していくことと、人が憩うための公園は本当に両立するのか疑問である。しかも、駿府城公園は15ha程度しかない。ましてや防災機能を確保するということは、空き地を作っておくということである。はっきり申し上げて、この３つの方向性は、都市計画の専門家が見ればめちゃくちゃだということになるのではないか。15haの場所で全く異なる３つのコンセプトを共存させるのは困難である。市民アンケートを基に策定したとのことだが、その市民意見の集合に過ぎないのではないか。それはそれで、そういう時代もあったということでいい。しかし、こういう時代の中で、静岡市のあの場所に残された土地というものを、どうこの都市のために活用していくかという視点から見た時に、私はこの３つの方向性を完璧な形で並存させることはできないと思う。では、一番力点を置くのはどこか。その点を考えてみた方がいいのではないか。特に憩いの場所がないという声であるとか、また静岡市は「住みやすい」という他の都市にない利点を持っているが、それをさらにブラッシュアップするための、魅力付けをするための場所として駿府城公園を考えた時にどうなるのか。既に歴史的建造物は

いくつか復元しており、今も発掘調査をしているわけなので、これを今後どうするかということをもう一度真剣に考えた方がいいのではないかと思う。本来、本審議会ではどのようなユニークベニューを行うかなど使い方を検討しなければならないが、その前にあの場所がどうあるべきかということをしっかり議論した方がいいのではないかという気がしている。

大分詰めた議論をしたので、一旦休憩とする。再開後、駿府城公園だけではなく、市全体、あるいは駿府城公園周辺について、市がどのように整備をしようとしているのかということについて説明してもらい、そこからまたご議論いただきたい。

≪休憩≫

岩崎清悟会長：それでは再開する。これまで駿府城公園について議論を進めてきたが、静岡市が駿府城公園を含めた全体のまちづくりの方向性、あるいは駿府城公園に至るアクセスを含めた整備の考え方等々について市から説明していただき、その後議論に入ることとしたい。それでは、企画局から説明願いたい。

≪略：企画局説明≫

岩崎清悟会長：ただ今説明のあった内容が、静岡市全体のまちづくりの一つの方向性ということである。この「歴史文化の拠点づくり」というコンセプトの上位にある政策課題は、人口減少社会にどう対応していくかということであると理解してよいか。

政策推進統括監：そのとおりである。先ほど説明した「「世界に輝く静岡」の実現」と、「2025年に総人口70万人を維持」の２つを目標としている。

岩崎清悟会長：アトラクティブな、魅力的なまちづくりにしていかなければならないということ。つまり、各委員からの意見にあったように、若い人がここで暮らしたい、ここを訪れたいと思うような魅力的なまちづくりにしていかなければならない。そのキーコンセプトとして歴史文化を活かしたまちづくりをしようということである。それが既に動いている第３次総合計画の大きな方向性となっている。

このまちづくりの方向性や人口減少の問題、若者に関心をもってもらえるようなまちづくりなどの今日的な課題などを前提にしながら、各委員にもう一度、３つの方向性のうち何に力を入れるべきか伺いたい。私の抱いている印象は、15ha弱の中でこの３つが全て満足いく形で共存することはかなり厳しいということである。この方向性は、おそらく市民アンケートにおいてニーズの高かったものを集めてきたという程度だということが透けて見えているので、それだけでいいのか。審議会は決して市民の意見を集約する場ではないと思っているので、今日的な課題を踏まえ、この３つが共存できると考えているのか、それともこの３つまたはそれ以外のいずれかに力を入れる、あるいは優劣をつける方がいいと考えているのかということを伺いたい。答申にあたっては、審議会として一つの方向性を示すことになろうかと思うが、その答申を受けてもう一度整備計画を議論するというところに繋がっていけばいい。

小林敏宏委員：資料３の４ページに駿府城公園計画平面図があるが、この中にヘリポートが描か

れている。これで防災機能の確保はできているということか。

都市局：ヘリポートの機能に加え、内堀の一部を空堀とすることで、広域避難時の避難人口を収容する計画となっている。

小林敏宏委員：先ほども述べたとおり「史実に基づき復元」というところに無理がある。岩崎会長から「歴史的遺産の保存・再整備」と「都心部の公園機能の強化」の２つを同時に実現している公園はないのではないかという話があったが、私は「静岡流」ということで、駿府城公園の中でその両方を満足させるような方策を考えるのが一つの方向性としてあると思う。「史実に基づき」という部分は無理があるので変えて、「静岡流」ということで、歴史もあり市民も憩うことができる、なおかついざという時には防災の拠点にもできる公園にするのは可能である。市民の憩いの場とするには何が必要かと考えると、休憩ができる場所や飲食ができる場所といった意見が出てくるだろうし、子供が遊べるスペースをミックスすることも考えられる。そういったことは今後の肉付けでできると思う。やはり歴史を感じるには、天守閣がほしいのではないか。それが一つあれば十分歴史を感じる。清水御門は後から作ればいい。既に桜の木がたくさんあるし、紅葉もきれいだったと記憶しているので、これ以上木を植えて金沢の兼六園のようにする必要もない。そうなると市民の憩いの場ではなくなってしまう。ここに天守閣があれば、駅を降り、呉服町通りを通って駿府城公園まで来る人の流れはできると思う。ウォーキングもブームなので、電車で来てウォーキングシューズを履いて楽しんでもらうまちというのもありなのでないか。健康と歴史、また買い物や飲食も楽しめるまちということで、現在の計画に上手く肉付けをしていけば面白い公園ができると思う。ただの広場では駄目である。大人も子供も楽しめるなど、いろいろな要素を入れたらいいと思う。

岩崎清悟会長：小林委員に質問であるが、委員の言う天守閣の建設を進めていった時に、収入源はどうなるのか。天守閣を作るとなると、相当な財政支出が必要になる。また、ユニークベニューは特別な場所ということであり、それをどう活かすかということも審議会に与えられたテーマである。市民が喜ぶということは無形の市民サービスであるが、それでは市は保たない。ではどうして儲けたらいいかというと、どんなことが考えられるか。

小林敏宏委員：民間活力の活用として、天守閣を民間が作るということもありだと思う。例えば、京都水族館はオリックスが建設・運営している。その際は復元ではなく、鉄筋コンクリートで作ってもいい。要するにそこに象徴があるということが重要である。鉄筋コンクリートであれば防災対策にもなる。100億円の残額もあるし、民間の活力を活用し、駿府城公園と紅葉山庭園の利用料をセットにすれば、お金を出してくれる企業はあると思う。そこで採算を考える。飲食のスペースが作れるかどうかという問題はあるが、それができれば経営していく中で十分観光として成り立っていくのではないか。おそらくプロが採算を考えて乗り出してくれるので、声をかけていけばいい。とにかく街中に歴史を感じられる象徴が欲しい。

岩崎清悟会長：極論すれば、元々史実として資料がないので、史実に基づかず、アミューズメント施設として天守閣を作ったらいいのではないかという意見か。

小林敏宏委員：そうである。

岩崎清悟会長：むしろその方が理解しやすい。つまり民間が、アミューズメント施設として天守閣を作る。そういった内情は傍から見ても分からないので、そこに象徴ができる。

小林敏宏委員：駿府城の設計図はないが絵図はあるので、その雰囲気が出ればいい。
岩崎清悟会長：そう割り切らないと天守閣はできない。
都市局：現段階ではできない。文化財保護法上の制約をどうクリアしていくかという問題もある。
岩崎清悟会長：文化財保護法上の問題とは何か。
都市局：駿府城公園は埋蔵文化財包蔵地となっているため、工事の際には届出が必要となる。
観光交流文化局：駿府城公園は、かつて駿府城があり、それ以前には今川館があった場所であるため、この土地に何かを建てる場合には、文化庁に対してどういった根拠でどういったものを建てるのか届出をし、その土地を保存管理できるかどうか調査することが必要である。つまり、何かを建てる場合には、下の土地を守らなければならないというのが文化庁の基本的な方針である。ただし、駿府城公園は現在史跡にはなっていないため、地下の遺跡を守ってさえいれば、その上には何を建てても良いということになる。しかし、文化庁からは駿府城公園を史跡にするよう強く求められており、史跡に準ずる取扱いとされているため、例えば東御門・巽櫓の復元の際には、文化庁から細かい指導があったと聞いている。
岩崎清悟会長：今天守台の発掘を行っているが、天守台の四隅は全部残っているのか。
観光交流文化局：今年の発掘で北の隅と南の隅が出てきたので、来年度以降の発掘で西の隅と東の隅が出てくれば、全て残っているということになる。
岩崎清悟会長：それらを残すようにすれば保存はできているということ。
観光交流文化局：上に何かを作る場合には、発掘された石垣をちゃんと保存できるかどうかが問題となる。
岩崎清悟会長：さらにその下にあるとされる今川館は関係なくなるということ。
観光交流文化局：今川館が出てきた場合には、その遺跡そのものを保存するのか、記録保存のみとするのか、再度文化庁と協議することとなる。
岩崎清悟会長：いずれにせよ“なんちゃって駿府城”を作る余地はあるということ。先日会津若松城に行ってきたが、“なんちゃって会津若松城”である。しかし、それがとうとう3.11の地震で壊れなかった。素晴らしい城である。なぜあのようなものが静岡市では作れないのかと思った。周りの石垣は当時のままである。それだけで十分に「ああ、昔ここに会津若松の城があったのだな」ということが分かる。エビデンスが出てこないにもかかわらず、なぜ史実にこだわり続けるのか。その点は考える必要がある。
内野孝宏委員：「防災機能の確保」については、いざという時にはそこが空間になって人が避難できる、物資を運び込む拠点になる、情報連絡の拠点になるという風にしておけばいいのではないかと思う。「歴史的遺産の保存・再整備」については、小林委員の意見にもあったとおり、「史実に基づき復元する」という部分にこだわりすぎず、拡大解釈して賑わいと繋げるという観点から、歴史の捉え方を未来の歴史を作るような方向性にできないか。５大構想においても過去の歴史にばかり目が向けられているが、歴史というものを拡大解釈する方がいいように思う。ただ、天守閣については、100年200年経った後でどうのこうのと文句を言われるのも嫌なので、ある程度史実に基づいたものであってほしい。それはそれとして、むしろ賑わいづくりのために歴史を利用しようという観点から出口を見つけていければいい。
　駿府城公園までの動線について、現状では駿府城公園自体を目的として訪れる人は圧倒的に

少なく、静岡駅から呉服町、七間町などへのルートがメインである。大道芸ワールドカップの期間中などは駿府城公園がどこか聞かれることが多いが、県庁があるために道順を説明しづらい。あそこを誰もが通りやすくなるよう県が考えてくれるといいと思う。

まとまらないが、要するに「歴史的遺産の保存・再整備」と「都心部の公園機能の強化」を上手く融合できればと思う。

岩崎清悟会長：５大構想における「歴史文化の拠点づくり」というコンセプトの中には、交流人口の増大、つまり観光面での期待も入っているのではなかったか。

政策推進統括監：入っている。

岩崎清悟会長：市民が歴史文化を楽しむということよりも、外から人が来てくれることを期待するということが入っているということ。

政策推進統括監：歴史文化の拠点づくりの方針①「歴史文化の伝承と新たな魅力の創出による風格ある街並みの形成」は、まさに「観光・交流人口の増大を図る」ということを目的としている。方針②「駿府城公園周辺における賑わいと潤いのある新たな公共空間の創出」はどちらかというと生活者の視点である。

岩崎清悟会長：観光を主体にするのか、住んでいる市民を主体にするのかと考えた時に、必ずしも相容れない部分が出てくることが往々にしてある。例えばここが観光スポットになったとすると、子供の遊具などは置いてほしくないという意見が出てくるかもしれない。それは市民の憩いという点からすると、静岡市には公園がそう多くないので、子供が遊べる空間を残してほしいとなる。この整理は難しいと思うが、市ではどのように考えているか。

政策推進統括監：観光にはそういう要素がある。観光産業に携わっている人は観光客が増えれば嬉しいが、そうでない人は嬉しくない。ただ、「歴史文化の拠点づくり」においては共存できるという前提で考えている。先ほどセントラルパークの話もあったが、市民が楽しそうにしている空間は観光客にとっても魅力的だという考え方である。

岩崎清悟会長：そのような考え方で融合を図っていくということ。

観光交流文化局：補足すると、従来であれば発掘調査はその中だけで終わっていたが、今は「見える化」ということで、市民や子供たちに体験してもらう取組を実施している。来年度からは観光客向けにも実施するよう、観光商品化を図っているところである。また、そこで案内をするのは市民である。このまちや歴史が大好きな市民が、外から来た方々に自分の言葉で説明することが観光客にとってもいい体験になる。政策推進統括監からも説明があったとおり、決して観光と市民生活が相反するものばかりではないと考えている。そういった意味で、おもてなしをする市民の人材育成も進めているところである。

岩崎清悟会長：ものすごく嬉しい答え。実は海外で人気のあるスポットは、全部生活がそのままである。観光地として美化されたところはだんだん人気がなくなっている。暮らしそのものを観光客が楽しむということである。例えば、ロンドン郊外のある古い街はまさにそれで、レストランもいわゆるレストランという感じではなく、民家のダイニングテーブルで食事をするような雰囲気だが、非常に人気がある。そういった事例もあるので、観光と市民生活は融合できると考える。その融合しようというコンセプトは是非持っていてもらいたい。併せて、市民に対し、この公園ではこれだけはやめてほしいというように一定の制約を設けることを検討して

もらいたい。難しいところだが、あまりに生活臭さを出してしまうと観光客が寄り付かない。必ず融合はできると思うが、その際はある程度行政のリードが必要になるので、検討してもらいたいということである。

西村やす子委員：先ほどお話のあった会津若松城は、白虎隊の歴史をみんな知っているので“なんちゃって会津若松城”でも何となく感慨を覚えられるが、駿府城に対して全国の人がそういった感慨を抱くかというと疑問である。また、セントラルパークはホットドッグの店が点々としているくらいで本当に何もないが、すごく人がいる。それは、まちのつくり方も要因としてあると思うが、ニューヨークという世界最先端の街に住む人たちの民度というか、成熟度の違いにより公園に求めているものも違うということがあると思う。市民の憩いの場とするにしても、静岡市の住みやすさを発信するにしても、何がこのまちにとっていいのかというのは、まだ言葉にしづらい。静岡は主体的には動かない人が多い地域と言われており、飽きっぽいなどとも言われるが、イベントとなると異様に人が集まってくる。街中や駿府城公園のイベントにも驚くほど人が集まり、終わるとさっと引いていく。そういう市民に対してアピールするには、毎週仕掛けをしておかないとならない。ガンダムも異様に人を集めた。あの巨大なものが一つあるだけで、全国のホビーファンなど多くの人を集めてしまう。また別のマーケティングの話になってしまうかもしれないが、一般的な感覚ではなく、自分たちのまちの属性などについてしっかり研究した上で考えたところが上手くいくのではないか。地方創生に関するニュースなどを見ていると、こんなもので人が呼べるのかという事例がいくつもある。個人的には「都心部の公園機能の強化」がいいのではないかと思う。

岩崎清悟会長：セントラルパークに何を見に行っているかというと、ニューヨーカーを見に行っている。あそこに行くとニューヨーカーに触れられる。周りのマンションやアパートに住んでいる人たちが朝散歩に来ていて、そのファッションが素晴らしく、本当にハイセンス。それがニューヨークの街、ニューヨークのライフスタイルそのものであり、それが見られるというのが魅力なのである。静岡市は全国でもファッションセンスのいい街として有名である。それを活かし、例えば駿府城公園に出かける時はおしゃれをしようとか、ウォーキングに行くにもおしゃれなウォーキングシューズを履こうとか、そんな街になればあっという間に費用をかけずに有名になれる。これは今すぐにでもできることなので、少し考えてみてもらいたい。

種本祐子委員：私は天守閣については大反対である。お金があるから作ればいいというのはとんでもない話。今の論点は人口減少を改善するためにどうしたらいいかということなので、人がいることが前提ではなく、いかに駿府城公園を歩く人を増やすにはどうしたらいいか、そのために公園がどうあるべきかを議論するものと理解している。セントラルパークもニューヨークにあるから素晴らしいのであり、なぜかと言うとニューヨークは世界の経済の中心で、いろいろな企業や文化が集まっており、人がたくさん住んでいるからそれを見るのが楽しいのである。南部のモータリゼーションが衰退した街にセントラルパークを作ったところで誰も来ない。そもそも公園に天守閣を作れば人が来るかとか、憩いの場を作れば人が住んでくれるかとか、そういったことは静岡市だけではなく全国の地方都市に共通する課題であり、人口減少をどう食い止めるかという中での人口の奪い合いだと思う。特に若い人に来てもらいたいが、歴史的建造物があればわざわざ東京から静岡に来てくれるのか。以前、若いお客さんが来た時に連れて

行くところがなく、掛川城まで行ったことがあるが、街はシャッター通りで寂れていて、突然天守閣があり、昇ってもどうということはなかった。そういうものを作ったからと言って人が来てくれるという安易な時代はもう終わったのではないか。だとすると、公園だけではなく、どうしたら若者の人口が増やせるかという議論と併せて、若者がどういう公園があれば喜んでくれるかと考えるべきである。おそらく、若い人は自分の払った税金を天守閣に使うより、子供や子育てしやすい憩いの場に使ってほしいと考えるのではないか。３つの方向性から１つ選ぶのであれば、これだけ私たちのために市が考えてくれた公園があるのだということを感じられるような、市民の憩いや楽しみの場として整備するということを重視する。防災はインフラだけではなく、災害時の運用などソフトを含めた全体の問題であり、静岡市という街がどれだけ防災に取り組んでいて住むのに安全かということを考えなければならないので、また別の議論である。歴史的建造物と市民の憩いの場のどちらを取るかと言えば、おそらく若い子育て世代は後者を選ぶではないかと思う。

岩崎清悟会長：私は静岡交響楽団の理事長をやっているが、先日の公演に東京から支店長が来ていた。その人は市民に関心があり、30分くらい前に来て通る人をずっと見ていたそうである。ご夫婦で来る方も多く、女性は静岡の街中では見たこともないほど着飾っていたという。私はそれがすごく嬉しかった。つまり、静岡市に住んでいる人たちは、今日はおしゃれをしてどこかへ出かけようという機会が圧倒的に東京に住んでいる人たちより少ない。若い人たちにとって魅力がないという理由の一つがこれである。弊社に東京生まれの若い社員がいたのだが、突然辞めるということになった。非常に優秀な人材だったのでなぜ辞めるのか聞いてみると、仕事は面白いが土日に何もすることがないと言う。若い人がなぜ戻ってこないのか、我々はよく考えなければならない。仕事だけではなく、余暇の過ごし方の選択肢に圧倒的な厚みの違いがある。それは東京には追い付かないが、例えば静岡にいても週末には音楽が聞けるとか、公園に行くといい雰囲気の憩いの場があるとか、そういったことを考えて上げることがとても大事である。歴史文化の拠点ということにこだわりすぎてしまうと、若い人の目線からは離れていくかもしれないという心配がある。

政策推進統括監：「まちは劇場」と連動しているのはまさにそのためである。

狩野美佐子委員：私は決して３つから択一する必要はなく、この部分では歴史、この部分では公園、この部分では防災というように、上手く調整することが可能ではないかと思う。

　先日紅葉山庭園を視察し、丁寧に説明もしてもらったが、この庭園は市民の税金をふんだんに使った宝の山である。しかし、その宝の山でしおりになっているものがない。10年ほど前にも紅葉山庭園に行ったことがあるが、いつも広間ばかりでお茶室に通されたことは一度もない。こんなに立派な京都の名刹にも勝るような庭園があるのに、しおりでは全然触れられていないというのは非常にもったいない。その点をもっとＰＲした方が良い。

酒井康之委員：一つに絞り込むのはなかなか難しいが、個人的には、若い方が将来住みたいと思えるようなまちづくりという観点から考えれば、やはり「都心部の公園機能の強化」が中心になってくるのではないか。防災機能については、周辺の施設等との連携で対応できる部分がある。

的場啓一委員：元々公園の設置目的は憩いや潤い、癒しを与える空間を提供するということであ

る。たまたま今回の議論の俎上に載った公園が城跡であったということなので、根本に立ち返れば、豊かな憩いの場を提供するということを中心に考えるべきである。古い歴史があるところに新しいものを入れて両立するかということが先ほどから議論になっており、セントラルパークの事例なども挙がったところであるが、別の事例として、パリのルーヴル美術館のコンセプトが「未来へ向かう古の美術館」である。昔からあるものに現代の美術品を加えて未来に伝えようということである。ルーヴル美術館の前にはチュイルリー公園があり、パリで最も古く広い公園と言われている。パリで最も古いということは世界で最も古い公園かもしれないが、そこに近代的なカフェやレストランがあり、子供を連れて行っても遊ばせることができるスペースを完備している。つまり、歴史と近代を上手くマッチさせて人を集め、それをさらに未来へ繋げていこうというコンセプトで運営されている。駿府城公園とルーヴル美術館やチュイルリー公園は比較できないかもしれないが、世界にはそのように古いものと新しいものを上手く融合させ、歴史的な価値も持たせながら未来へ引き継いでいこうという場所もあるので、そういったところも参考にして検討すべきではないか。ただ、コンセプトとして中心に置くのは公園本来の目的である市民に憩いを与えるということであり、たまたまそこが歴史的建造物のあった場所だということである。

小林敏宏委員：誤解があったのだが、私も天守閣の建設にはずっと反対であった。理由は種本委員と同じで、費用をかけて天守閣を作ってどうなるのかということである。ただ、一番分かりやすい手法だと思う。掛川城も建設した当初はわっと人が来たが、その後何もしなかったのであのようになってしまった。つまり、天守閣という分かりやすいものが一つあれば、とりあえず５年程度は人が来る。その集まった人たちをどのように回遊させ、リピーターを獲得していくかということを市民と行政が一体となってやっていけばいいのではないか。ただ、税金はかけたくないので民間の資金を上手く使えばいい。行政が建てると、その後どうしても維持管理費がかかってきて負担になる可能性が高い。民間がやれば採算を考えるし、人を呼ぶための仕掛けもやる。そういう意味ではいいと思ったので、考えが180度変わった。

岩崎清悟会長：それでは、議事については以上とする。やはりコンセプトづくりは大事な部分なのでしっかりやらなければならないが、従来の整備方針が今の時代に合っているかというと、少し変わってきているのではないか。では何を重点的にやるかというと、どうやら「歴史的遺産の保存・再整備」と「都心部の公園機能の強化」は融合できそうなので、運営の仕方を考えていくのも一つの方向ではないのかということで、本日の結論とさせていただきたい。それでは、以上で第６回行財政改革推進審議会を終了する。

署名　　静岡市行財政改革推進審議会

会 長　岩崎　清悟